岩村城跡の発掘調査

岩村城跡第３次発掘調査の成果（中間報告）

現地説明会資料／平成22年12月５日
恵那市教育委員会

【岩村城の歴史】

標高717mの通称城山に築かれた山城。俗に創築800年といわれていますが、これは加藤景廉の遠山荘地頭補任にちなんだもので、現在の山城が築かれ始めたのは16世紀はじめごろだろうと考えられています。遠山岩村氏の居城でしたが、元亀年間以降、城主はめまぐるしく交替します。

遠山氏最後の当主景任は、織田信秀の妹を室に迎えていましたが、一貫して武田軍団の一員として行動していました。元亀３年（1572）の夏に景任が病死すると、織田信長は、この機を逃がさず、子の御坊丸を養子に送り込み、岩村城を奪取します。これに対して、武田方は11月には城を取り返すことに成功し、秋山虎繁を城主としました。天正３年（1575）長篠の合戦で武田が大敗すると、信長は直ちに嫡男信忠を総大将として岩村城を囲みました。半年に及ぶ籠城の末に城は落城し、虎繁は処刑され、城内の甲信の兵や遠山氏の家臣は皆殺しにされたといいます。その後、河尻秀隆、団忠正が城主となり、小牧長久手の合戦後は金山城主森忠政の属城となりました。

関ヶ原合戦直前には田丸直昌が四万石で入りますが、西軍に属して改易され、慶長６年（1601）に徳川譜代の松平家乗が２万石で入部しました。現在見られる石垣造りの近世城郭は、家乗の整備によるものです。

【発掘調査の目的】

岩村城跡の今後の国史跡指定、保存や整備に向けた基礎的なデータの収集のために、平成20年度から５年計画で次のようなことを調べています。このうち発掘調査では、④～⑨を主に調べています。

① 城山の環境
② 城山の地形とそれをうまく利用した城の範囲（縄張り）の把握
③ 石垣の位置と状況
④ 石材をどこで調達したか
⑤ 城山の上に、最初に城を築いたのはいつごろか
⑥ 山をどのように削ったり掘ったりして城を作ったのか
⑦ 現在のような立派な石垣を持つ城に整備されたのはいつか
⑧ 最初にあった城をどのように改造、整備していったのか
⑨ 廃城後から今日に至るまで城に手が加えられているが、昔の遺構はどの程度残っているか

【調査概要】

遺跡名称　岩村城跡（岐阜県史跡）
調査個所　①出丸西方尾根斜面（採石場（石切場）推定地）
　　②本丸埋門付近
　　③八幡曲輪河合五郎作屋敷
調査面積　約130㎡
調査期間　平成22年10月12日～12月17日（予定）
調査主体　恵那市教育委員会（担当：文化課）

【調査成果（中間報告）】

◎石垣の石材を採掘するための採石場（石切場）跡を確認

内容　　平成20年度の分布調査により、出丸から西に伸びる尾根の先端（出丸から約150ｍ）の斜面に直径3.5mのくぼみが３個所並んでいるのが確認され、石垣石材の採石場（石切場）と想定されました。今回はそれを確認するため、このうちの一つにトレンチ（調査用の溝）を設定し調査を実施しました。

成果　　くぼみの中はかく乱され、くぼみの前面に広がる緩やかな斜面には掘り出された土と石（排土）が堆積していました。くぼみの中及び周辺には摂理に沿って人為的に割られた人頭大～直径50cm程度の石が散乱しています。また、トレンチの脇では、１点のみですが、矢穴（石を割るために打ち込んだ鏨の跡）のある石が見つかりました。これらから、このくぼみは石垣の石材を採石した痕跡と考えられ、この場所が採石場であるとみることができます。

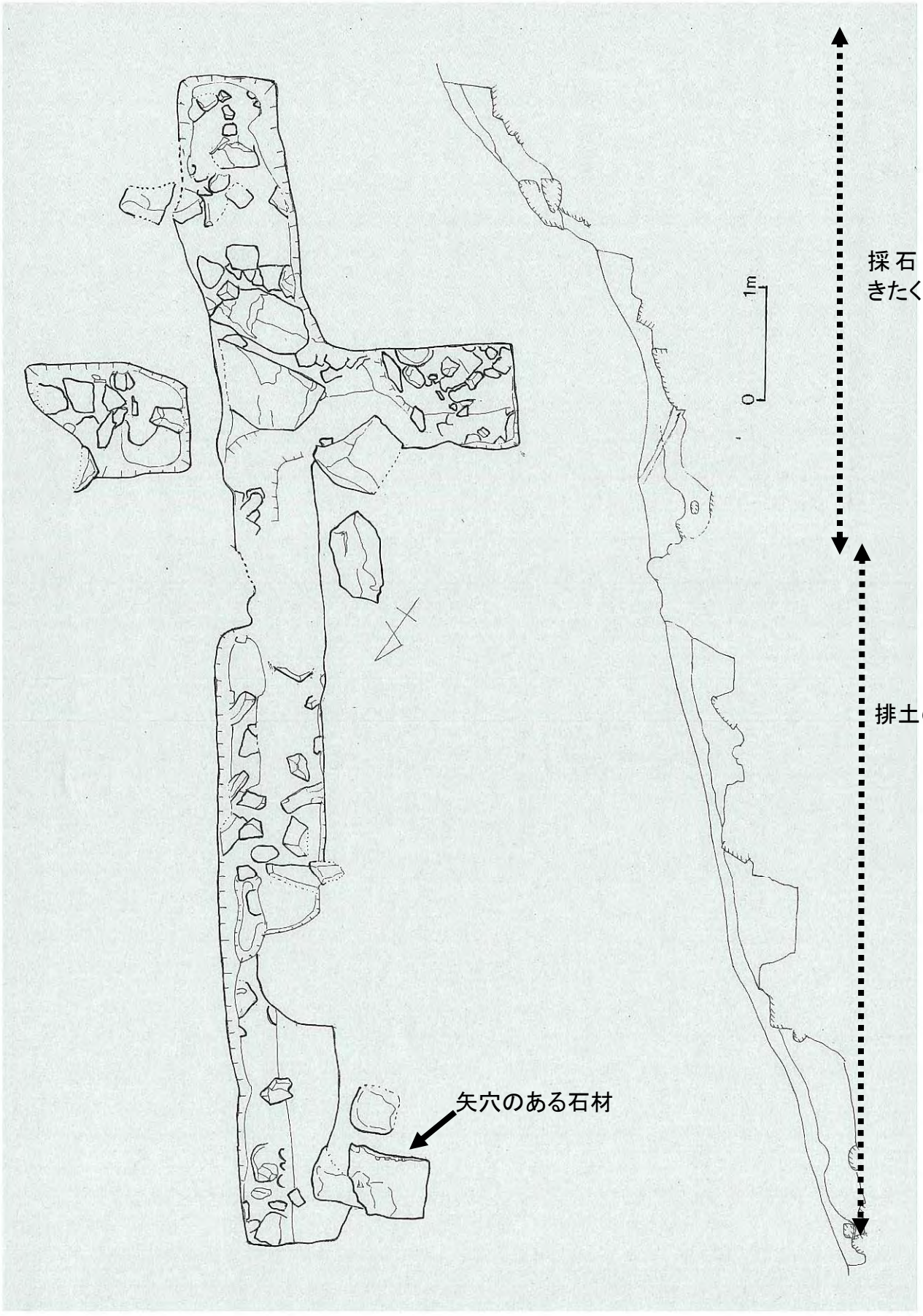
　採石場の年代は、年代判定の資料となる陶磁器等の遺物が出土していないため直接的には確認できませんでした。矢穴の形状は、本丸等の石垣のうち18世紀以降に修理されたと考えられている石垣に見られる矢穴の形状と類似することから、築城当初の採石場ではなく、江戸時代中期以降に石垣の修理・補修のための石材を採石した採石場と推定することができます。

意義　　岩村城の石垣は、享保３年（1718）の大地震をはじめとする自然災害によりたびたび崩落し、そのたびに修理を加えながら現在に至っています。今回の調査では、そのために必要な石材が外部から搬入されたものではなく、城山の中で調達されたものであることを確認しました。全国的にも石垣の石材の採掘地が明らかになっている例は少なく、補修用とはいえ、採掘地が確認された意義は大きいとかんがえています。また、江戸時代を通じて、岩村城がどのように維持管理をされてきたかを知る資料としても貴重です。

中井均氏（NPO法人　城郭遺産による街づくり協議会理事長）のコメント

　江戸城や大坂城などの天下普請による築城での採石場や、金沢城や名古屋城などの大大名の居城の採石場は判明しているが、地方の小藩の築城における採石場はほとんど不明である。今回築城当初の石切場ではないが修理に伴なう石切場が確認された貴重な事例となろう。

　その採石工法は母岩となる巨石を円形に掘り出し、節理に沿って割るか、矢穴を穿って割り、石材を採っていた。例えば金沢城の採石場であった戸室山ではキゴ山地区で同様の採石の行なわれていたことが発掘調査で確認されており、広く行なわれていた工法であったことが知られる。



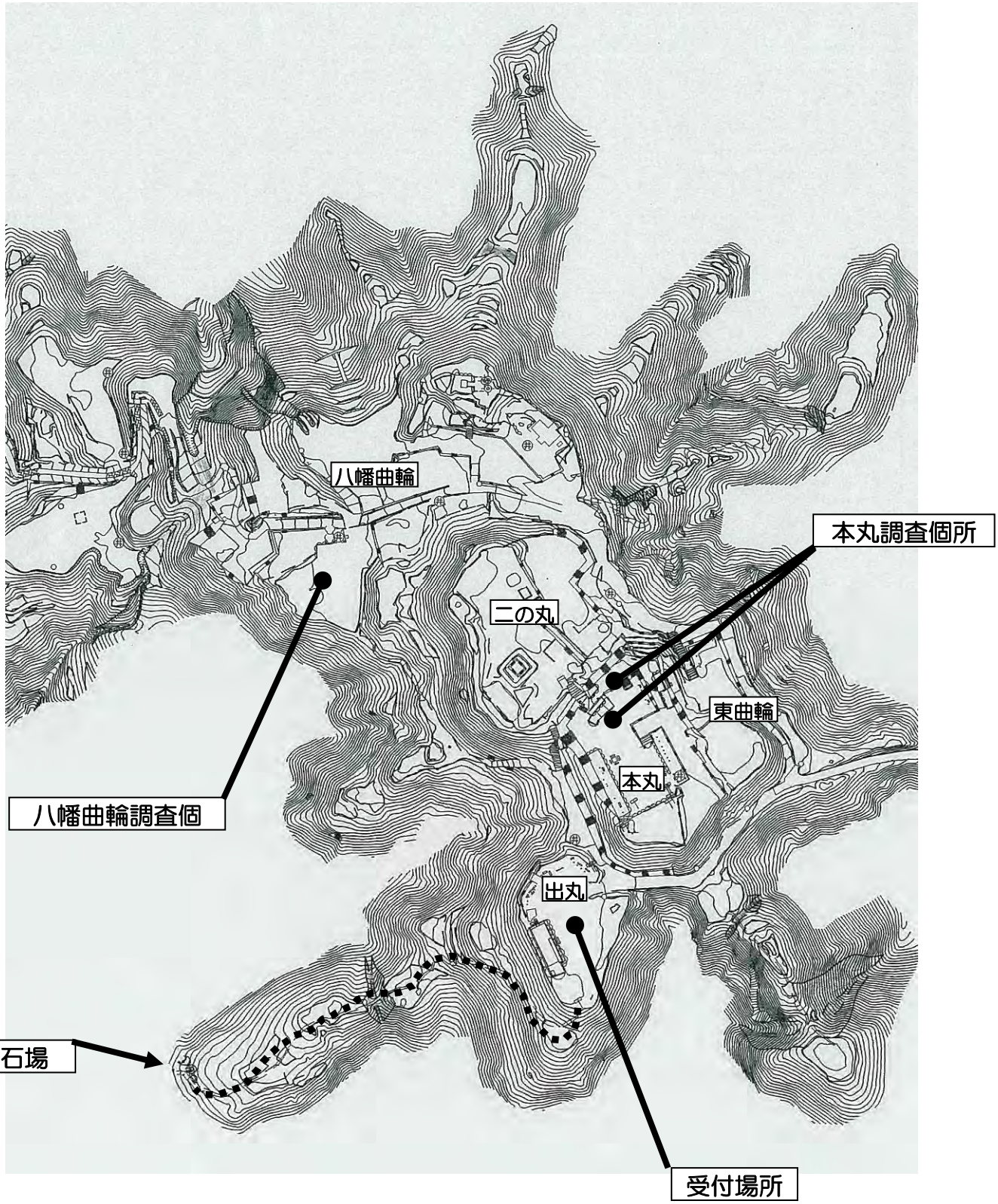
出丸西方尾根斜面（採石場（石切場）推定地）トレンチ平面図

◎その他の成果

・本丸石垣の基礎の構造を確認

本丸北側の埋門の通路が地山を掘り抜いて築かれていること、本丸上段の石垣は、地山を岩盤まで掘り、岩盤の上に直接石を置いて築いていることが判明しました。

・八幡曲輪の侍屋敷は幕末まで存続していた

明和城絵図（明和３・1766）に「河合五郎作」と表記され、他の絵図にも侍屋敷の表記のある曲輪を調査しました。

表土直下で石列を検出したほか、幕末の陶磁器片が多数出土しました。調査範囲が狭いため石列の性格は不明ですが、幕末までこの曲輪が生活の場として機能していたことが判明しました。